

組織的・学校図書館支援を日常的に

高桑 弥須子

1. はじめに

必要があるところに、いつもよりちょっと力を出して、できるときにできるものができるだけ、というものがボランティアであろう。今回、学校図書館メーリングリスト“sl-shock”を通じて学校図書館支援の要請を知った。そして Web 上でリアルタイムにボランティア活動の進捗(しんちょく)状況を知ることができたので、現地の要請とこちらの都合と一致するところに手をあげて、どんどん進めていくことができた。

また、このメーリングリストを受けて、新潟学校図書館支援要請のメールを、市川市の学校図書館全校(56校)に一斉送信して協力を募ったところ、「行くことはできないが、こちらでできることがあれば」というたくさんの申し出があり、児童生徒作成のしおりを新潟の多くの小学校に贈ることができた。インターネットを活用した迅速さと手軽さを感じ入った次第である。(参照 <http://milch.cocolog-nifty.com/slshock/>)

2. 学校図書館の現状

ところで、何かことが起こって初めてこれまで隠れていたところが明らかになるというのは、世の常である。今回新潟ボランティアに行きより強く考えたことは、災害時の支援のありかたよりも、平時の学校図書館をいかに支援すべきかということであった。

お話会と学校図書館整備支援の要請を受けて2名で行った学校は、まだ築10年ほどの新しい校舎。日当たり抜群の図書館は木の風合

が心地よい。しかし、学校図書館は児童館を兼ねており、午後になると児童館スタッフが到着し、放課後は児童館となる。図書館の準備室は児童館の事務室でもあり(こちらが主体)、図書館だけのものではない。午後は(低学年の放課後)児童館利用者として子どもたちがやってきて、遊び場となる。…つまり、この学校に学校図書館としてだけの部屋は、ない、のだ。本棚も書架としては奥行きが深すぎることや、作り付けであることなど不適切。本の装備はその年によって違い、ラベルの色も分類の桁(けた)数等も不統一である。付されている分類番号は不適切なものが少なくない。当然配架も統制が取れず、内容ではなくシリーズでまとまっていたり、年度ごとにかためておいてあったりする。さらに児童館所蔵の本と学校図書館の本と混在しており、児童館所蔵本が図書館内のよい場所にあって動かせないため、全体を見通しての系統的な配架ができない(一つの部屋の中で分散配置状態になっていることでもある)。



明るい図書館

この分類や配架の不統一等は、震災の被害ではなく、日常整備がきちんとできていないことによる。しかしそれは図書館担当者の責任とはいきれない。校務分掌上突然図書館担当者となった者は、学校図書館の経営理論も何もなく、前任者が行っていたことを踏襲するだけで終わってしまう。それすら取りこぼして、購入した本が箱詰めになっておいてあるということも聞く。そして今回思い至ったのは、このような学校図書館は日本中いたるところにあるのだということだ。この学校は支援を要請するだけ意識が高い。自校の学校図書館が学校図書館として機能していないことにすら気づいていないところも少なくないであろう。

3. 今、求められることは

全国SLAの活動の筆頭に挙げられているのは「学校図書館の整備充実を図る運動」である。意識を啓発するとなると優れた実践を追及して広めることにばかり意義を求めてしまうものであるが、じつは今、底辺の底上げこそ早急に考えなければならないのではないのか。

学校図書館に関する任意の研究団体も複数あり、また、国語教育、情報教育など他分野からも学校図書館にアプローチされるようになった。優れた実践事例や研究は今や求めようと思えば資料はいくらでも入手でき、各種研究会を通して学校図書館は確実にレベルアップしている。反面、求めようという意識のないところ、「機能する学校図書館」という認識のないところとの格差は開く一方である。

学校図書館が「様々な資料・情報の活用を通して子どもたちの「自ら学ぶ力」をはぐくむ活動の拠点（学習・情報センター機能）、読書を通して子どもたちの豊かな人間性をはぐくむ活動の拠点（読書センター機能）として、その役割」（※1）を果たすためには、各地の眠っている学校図書館を目覚めさせることが必要であろう。今回のボランティアでめざましかったものは、人のネットワークの強みで

ある。ついてはこの、各都道府県学校図書館研究団体を傘下に治める全国組織であるからこそ、地元に着した支援を具体的に考えることができる。今こそ、この組織力を全体のレベルアップのために機能させたい。

青少年読書感想文全国コンクールの要項が、各支部を通してこれほど全国津々浦々にまで周知徹底されるのに、学校図書館の基本的ありかたがなぜいまだに浸透していないのか。合理性が問われているこの時代に、なぜいまだに図書台帳に1冊1冊の書名を転記する方法を改善してやらないのか。まずはそれぞれの地域で学校図書館を（それも声を上げない学校の図書館環境を）確認し、「学校図書館の充実発展と青少年読書の振興を図るために」（※2）子どもたちの教育環境を整えたい。

※（1）（2）とも全国SLAホームページ「全国SLAとは」より

4. おわりに

学校図書館担当者は日常作業を一人でこなすことが通常である。今回複数で共同作業をする楽しさを味わえたことが大きな喜びであった。それぞれ一人ひとりが考えて、的確に動きながらの仕事は本当に楽しい。これが専門職集団の大きな力だと実感した。

お話会の活動について最後に少し。お話会は子どもたちに大いに喜ばれた。「まだ時々、おびえて泣き出す子もいる」という11月の状況にあって、お話会のひとときは大きく声を上げて笑うことのできる時間となった。「だんごっこいしょ」の話の後では、「だんご だんご だんご だんご」と口ずさみながら帰っていく子もいた。

「お話」はどこにでもいける。大がかりな準備はいらず、どのような隙間にもはいっていくことができる。道具も何もいらない、身一つがあればいい。それだけでみんなで豊かなときをもつことができる。「お話」の力の再認識が今回の大きな収穫であった。（たかくわ・やすこ＝千葉県市川市立稻越小学校司書）